

「小さき者の幸い」(要旨)
聖書箇所：マタイの福音書18章10~14節

【1】 「小さい者」とは

誰が一番偉いのかと論じ合っていた弟子たちの真ん中に「一人の子ども」を立たせたイエス。この時、彼らの視線は一斉に子どもに向けられたことでしょう。「誰が一番偉いのか」と論じ合う彼らの眼中には、そもそも「小さい者」である子どもはいなかったからです。

人は「大きい者」には注意関心を払います。それは良くも悪くも、「大きい者」の動向がコミュニティー全体に関わって来るからです。一方「小さい者」は大勢に影響を及ぼさないため後回しにされやすいのでしょう。さらに「小さい者」は道に迷いやすくつまづきやすいことで知られています。そのため周りから頼りにされず、共同体のメンバーの頭数にも入りません。ところがイエスは、「…この小さい者たちの一人を軽んじたりしないように」(マタイ 18:10)と教えられたのです。

【2】 道に迷った羊

イエスは百匹の羊のうちの迷い出た一匹を捜しに出かけた羊飼いの話について話します。その人は九十九匹を山に残して迷った一匹を捜しに出かけます。その一匹を見つけたら、迷わなかった九十九匹の羊以上にこの一匹を喜ぶという内容です。「あなたがたはどう思いますか」(マタイ 18:12)。弟子たちが問われたように、私たちにも問いかけられています。この話を聞いていた弟子たちは驚いたことでしょう。なぜこの羊飼いは、自ら迷い出たたった一匹の羊のために、身の危険を冒してまで捜しに出たのかと。迷った羊に九十九匹に匹敵する価値があれば、羊飼いの行動は理解できたでしょう。しかしこの羊は、道に迷いやすい「小さい者」だったのです。羊飼いの行為を愚かな判断だと評価する者もいたでしょう。しかしこの羊飼いは、「小さい者」を唯一無二の存在として見ていたので、ためらうこと

なく捜しに出たのでした。

【3】 小さき者の幸い

イエスは一匹の羊を捜す羊飼いの姿を通して、神の私たち一人ひとりに対する愛、関心、そして守りを説明されました。

まず、道に迷った羊とは、神のもとを離れて行き無用の者となった罪人のことです(ロマ3:12)。神はそうした罪人を捜して見つけ出し、救うために一人子イエスをこの世に送られました。それは神の私たちに対する愛のゆえでした。「しかし、私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死なれたことによって、神は私たちに対するご自分の愛を明らかにしておられます。」(ロマ5:8)。

次に、神は小さい者に特別な関心を寄せておられると言います。小さい者のために「御使い」を送り、その報告を逐一受け、道に迷って滅びることを望まず捜してくださいののだと(マタイ 18:10b,14)。

そして、神は「小さい者」を見放すことのないお方です。「…主ご自身が『わたしは決してあなたを見放さず、あなたを見捨てない』と言われたからです。」(ヘブル 13:5b)

自分で自分は正しい道を歩んでいると自負し、捜してもらう必要がないと考えている「正しい人」もいるでしょう。羊飼いな神は、道がわからなくて、自分ではどうにもならないので助けて欲しいと願う者の声を聞いてくださるのです。ゆえに小さき者は幸いなのです。

「苦難の日にわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出しあなたはわたしをあがめる。」(詩篇50篇15節)

